

アイヌ民族の歴史と文化

第6回

—(ひと)(暮らし)(ことば)からさぐる—

アイヌ民族の散文説話



大谷 洋一 (おたに よういち)

北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究職員

1960年北海道穂別町仁和（現むかわ町）生まれ。1994年から北海道立アイヌ民族文化研究センター研究職員となり、2015年より北海道博物館勤務。アイヌ口承文芸の資料整理や調査研究を担当。

伝統的なアイヌ文学は、語り手の口から聞き手の耳へと声で伝えられてきた文芸であり、一般に「アイヌ口承文芸」と呼びます。文字で書かれる文学（小説など）と違うのは、語り手はその時々々の口演の場で聞き手の反応をみながら、表現することばを即興的に変えたりして演じる点です。アイヌ口承文芸は大きく分けて、節をつけて語る英雄叙事詩と神謡、節をつけずに淡々と語る散文説話の三つがあります。今回は、私が語り手から聞いた散文説話のいくつかを紹介します。

散文説話の種類

散文説話のアイヌ語呼称は、地域によって違いがあります。北海道の日高西部から道東・道北にかけてはトウイタク、様似ではイソイタッキ、樺太ではウチャシコマやトウイタハなどと呼ばれます。私が主にフィールドワークしていた日高地方西南部（平取町、日高町）のお年寄りにはウエベケレと言いました。散文説話は主人公が誰なのかという違いにより、アイヌ文学研究で

は伝統的に四つに区分されます。

- ① 人間の散文説話
- ② カムイの散文説話
- ③ 和人の散文説話
- ④ ペナンペ・パナンペの散文説話

「人間の散文説話」は、物語の舞台設定が現実の社会生活におかれ、通常は主人公のアイヌがカムイ（神）から守られながら様々な苦難を乗り越えた末に富や子宝に恵まれて幸せな生涯を終えたことをアイヌ自ら語るものです。ほとんどの語りおさめに子孫に対する教訓として、今後生きていくための心構えや戒めの言葉を述べます。日常生活で大きな出来事（事件）があった場合の対処の仕方を語った場面も多いので、アイヌ民族の倫理観（道徳や思想）と民俗・習慣を読み取るのに最も適している散文説話の中核的なジャンルといえます。

「カムイの散文説話」は、様々な動植物や自然現象などのカムイ自身が体験を述べる形式であり、「神謡」から物語固有のメロディーと折り返し句を省いて散文で語ったものであると従来から言われています。しかし、私の採録したカムイの散文説話はわずか3話ですが、話の内容が神謡を起源にするとは考えにくかったので、私は語り手に「これは元々カムイユカ（神謡）だったのかい？」と質問したら「昔からウエベケレで喋っていたよ」と答えられました。神謡起源の散文説話は同じストーリーの神謡が残っていれば確認できますが、そうではない伝承もあるようです。

「和人の散文説話」は、和人が伝承する民話をアイヌが取り込んだもので主人公は和人です。私は1話しか採録したことはありませんが、それは日本昔話の「お銀小銀」が基になったストーリーでした。継母が継子である姉を殺そうとする悪巧みを腹違いの妹が察知して姉の命を何度も救い、最後には父親が根性の悪い継母を殺害して残された家族が幸せに暮らしたという家族の葛藤を描いています。

「ペナンペ・パナンペの散文説話」は、基本的にパナンペ（川下の者）が成功して富を得た方法をペナン

ペ(川上の者)が真似をしたが失敗してひどい目にあってしまったという、日本昔話の「隣の爺」タイプ(例えば「花咲爺さん」)のストーリーが多く、子ども向けの滑稽話として語られてきたものです。口演時間も散文説話①②③では通常30分程度はかかります(1時間を超える場合もある)が、この種の物語は概ね数分で話し終えます。このジャンルについては、1937年という早い時期にアイヌ語学者の知里真志保氏が『アイヌ民譚集』(郷土研究社)で15編をまとめて紹介したので①②③に区分される散文説話よりも広く一般に知られたことにより、アイヌ民族の「散文説話」といえばペナンペ・パナンペであるという誤解を与えた側面があるかもしれません。

赤ん坊を子守したクマのカムイ

平取町ペナコリ出身の上田トシさん(1912~2005)は、ウエペケレの名手として名高い木村キミさん(1900~1988)の妹です。トシさんはキミさんからたくさんの物語を聞き覚えました。同郷に住む友人の小川シゲノさん(1921~2010)から聞いたものも少なくありません。その中から私が「赤ちゃんを置き忘れて逃げた女」という表題で発表した物語のあらすじを紹介します(本編が散文説話の「代表」ということではありません)。

私は狩の上手な夫と何不自由なく暮らしていたが、子どもがいないのでそれだけを欲しいと願っていた。子どもがいない寂しさをまぎらわすためになお一層働いていると、私はとうとう妊娠した。夫がとても喜んで私に外の仕事をさせなかった。私は料理や針仕事ばかりしていた。しばらくして出産すると、夫はとても喜んで赤ちゃんを大事にした。私はいつも家の中にいるのが退屈になり、我慢できずに赤ちゃんを背負ってオオウバユリ採りに行った。山に行くとウバユリの群生地を見つけて一所懸命にウバユリの根を掘った。赤ちゃんを地面に寝かせて、久しぶりに歌った。歌声が木原の上手や下手へ響き渡るのが面白くて歌いながらウバユリの根を掘っていると、突然、木の上からク

マの唸^{うな}り声が聞こえた。私は驚いて一目散に逃げた。家に着くと赤ちゃんを残して来たことに気づいた私が大声で泣いていると、夫が帰って来たので事情を話すと、驚いた夫は祭っている神々に危急を知らせて赤ちゃんの安全を夜通し祈った。夜が明けて私たちが山へ行くと、クマが赤ちゃんに覆いかぶさっていた。近くに寄るとクマが起き上がって赤ちゃんから離れたので、夫が弓矢でクマを倒した。赤ちゃんは無事だったので私が懐に入れて、夫はクマに礼拝して帰宅した。その夜、夫の夢にクマのカムイが現れて言うのには「私が散歩しているとお前の妻の歌声が聞こえた。その歌がとても面白いので木の上で聞いて、驚かせないように気をつけていたのだが、つい笑いながら拍手してしまった。お前の妻は慌てて逃げたのだ。お前の祈りを聞いた神々から私は「赤ちゃんを守らないと罰するぞ」と言われた。私は自分の舌をお乳の代わりに赤ちゃんに吸わせて守っていたのだ。そのことを神々に伝えると共に私の魂をカムイの国へ送ってくれ」ということであった。夫は何度もクマに礼拝し、私はそっと赤ちゃんに接吻した。夫は村人と共にクマの魂送りをしてから「私の赤ちゃんは無事だったので、クマのカムイを罰しないでください」と神々に祈った。するとそれからの夫はクマのカムイに見守られているらしく、ますます獲物に恵まれた。私が裕福になれたのはクマのカムイのおかげだから、いつまでもきちんと祭りなさい、と一人の女が子孫に語って死んだ。

この話でなるほどと思うのは、夫が赤ちゃんを助けるべく急いで山へ行かずに様々なカムイに赤ちゃんの無事を夜通し祈っている姿です。そしてその願いはカムイたちからクマに伝えられ、クマは赤ちゃんに覆いかぶさって低体温症になるのを防ぎ、喉の渇きをいやす



写真1 カムイに祈る小川シゲノさん(鈴木まり子氏提供)

ために舌を舐めさせていた。これは口演時間が14分と短く内容もさほど複雑ではないのですが、アイヌにとっては祈りを通してのカムイとの意思疎通が重要であることがよくわかります。シゲノさんはこの話を「昔はもっとオモンモモ（詳細に言う）したりヤ・ウエペケレ（越年する・散文説話）だったんだ」と言いました。聞きどころのある話は代々語り継がれるという意味で「越年する」ということばで形容するのです。

カムイからアイヌへの語りかけ

アイヌがあるカムイへ何か用件を伝える場合、アイヌは火のカムイに仲介を頼んで他のカムイたちに伝えてもらい、当事者のカムイはアイヌの夢に出て返答するという形式が一般的です。北海道アイヌが伝承する散文説話を分析すると、カムイが夢見で意思を伝える場面があったものは約8割でした。他の方法では、他村での出来事について動植物たちが語り合うのを人間のつぎことばとして聞こえた場合もあります。人は誰でも憑神（つきがみ）を持っていますが、憑神の力が特に強い人が持つ超能力のようなもので、アイヌ語では「オハイヌ（空・聴きする）」と言います。散文説話では、この能力が突然開花して、他の人の災いや病気の原因を特定して人助けをする巫女（みこ）になれたという、そのきっかけがストーリーとして語られることがあります。

アイヌにとって、散文説話で語られる世界と人間が生きている現実世界は連続しています。オハイヌは散文説話の中でも日常生活でも起きる現象です。私が2004年に帯広市の上野サダさん（1921～2007）から聞いた、彼女の祖母テツさんの体験談は次のとおりです。

祖母が若い娘の頃にオハイヌした話。広尾で用事を済ませた娘（テツさん）が一人で歩いて帯広へ帰る途中。朝出発したがすっかり暗くなった。誰もいない山道なのに「オレン シニアニ（そこで休みなさい）」という声が聞こえた。そこには大きなカツラの大木があって、大きな洞（ほら）が空いていた。娘はこのままでは疲れて倒れるかもしれないと思って洞に入ったところ、すぐそばをクマが「ウエ！ウエ！」と言いながら走り

去った。娘は夜明けまで木の洞に隠れていたのが無事に帰宅することができた。その木に「休みなさい」と言われたことでクマと鉢合わせにならずに命が助かったという体験を家にいた爺さんに話すと、爺さんは外にある祭壇でカツラのカムイに感謝の言葉を捧げた。

もし、サダさんがこの体験談の冒頭で「私には父と母がいて、父は狩が上手だったので何を欲しいとも思わずに私は暮らしていた」と話し始めて、最後に「私はカツラに救われたのだから、子どもたちにいつまでもカツラをカムイとして祭りなさい、と一人の女が言った」と散文説話の常套的なセリフ（じょうとうぎ）を付け加えていたら、私には体験談と散文説話の見分けはつかなかったでしょう。このような実際の人びとの体験談があちこちで何世代にわたって話し伝えられたり、また他人が聞いて誰かに伝えたりすることででき上がったのが「人間の散文説話」ではないだろうかとは私は考えています。

聞き手を呆れさせた散文説話

日高町厚賀出身の松島トミさん（1922～2010）は、門別ウタリ保存会の顧問として若い世代に伝統的な発声法によるアイヌの歌を教えていました。トミさんが得意とするアイヌ口承文芸は、神謡と同じように折り返し句をつけて歌うように語るイヨルイカ（子守り歌）とメノコユカ（女が語る詩曲）でした。それまでは聞く一方で自ら語るという経験のなかった散文説話を1998年から語り始めるようになりました。次の話はトミさんが初めて私に語ってくれた話です。

私は姉や妹や兄がおり、大勢の仲間と暮らす娘です。ある日、私は和人の村へ誰かに連れ去られ、一人寂しく泣き続けた。大きな川のそばにいと大雨が降る度に私は流されては岸に這い上がり泣いていた。何年か過ぎてから旅をして、ある牧場に隠れていた私は仲間の男性を見つけて喜び「私は一人寂しく暮らしていたが、あなたはどこから来たのですか」と言って泣きながら挨拶をした。やがて私たちは夫婦になり、山に隠

れて暮らし、たくさんの子どもに恵まれた。子どもたちが山や川の近くにいと、悪い和人が来て怒鳴りながら子どもたちを切って川に捨てた。それでも私は子どもをたくさん産んで、山でも川でも畑でも一面に増やした。和人たちはあいかかわらず子どもを川に捨てるが、私は子どもをたくさん産んで、何を欲しいとか何を食べたいと思わずに暮らしていたが、悪い和人たちが私たちを切ってしまう。そこで「お前たちはヨノコ（メヒシバという農家が忌み嫌うイネ科の雑草）を見ても根元から切って捨てるのではないぞ」と、ヨノコが話したのだと。

トミさんが初めてこの話を聞いたのは1955年頃で、稲の苗抜き作業中でした。トミさんが苗に混じって生えているヨノコを抜き捨てながら「ヒナッ ワ エッ ウェン キナ！（どこから来た悪い草だ）」とアイヌ語で悪態をついていると、一緒に作業していたKさんが語り始めました。トミさんは子どもを虐殺された主人公に同情しつつ聞いていると、それが最後に厄介者のヨノコであることが明かされたので、トミさんは呆れながらも笑うしかなかったそうです。話の中で「悪い和人」の役回りはトミさんのこととされたからです。その場で咄嗟にこの話を創作したKさんのパロディー精神に感心してしまいます。

知里真志保氏は散文説話の中に「アエミナポニタッ（われら・それによって・笑う・小さな・話）」という小話の類があることを報告しています。この話も人を笑わせる効果のある、植物が主人公の「カムイの散文説話」なのです。



写真2 筆者と雑談する松島トミさん

「白老」という地名の由来

アイヌ文化の復興拠点となることを目的に2020年に設立されたウポポイ（民族共生象徴空間）は胆振地方の白老町にあります。町名は従来の研究でアイヌ語の「シラウ・オ・イ（虻・多い・所）」が語源とされていますが、なぜ虻が多いのかは謎でした。私が小川シゲノさんから2000年の調査で聞いた散文説話は、この地名の由来を説く物語の一つでした。

私は両親と裕福に暮らしている娘です。伝染病で両親が亡くなって私は祖父とアワヤイナキビを作って暮らした。ある日、山へ薪取りに行くとき急に曇り風が吹いて、顔が半分黒く、もう半分が白い大きな男が現れて「お前を嫁に欲しくなったので飛んできたのだ」と言って私を誘拐した。風と共に飛んで海を越えて行った所で私たちは夫婦として暮らしているうちに私は妊娠した。生まれた息子は夫と同じような顔だった。夫は人間の肉を食い、私は別鍋で違うものを食べて暮らした。私は幼い息子に「いつか、お前の父親を殺して爺さんの村に舟で逃げようね」と言い聞かせた。成長した息子は夫に隠れて舟を作った。ある日、私と息子は眠っていた夫の首を絞め殺して家と共に燃やした。私が息子と舟に乗って村に帰ると祖父はすっかり痩せ衰えていた。私は祖父と泣きながら抱き合って再会を喜んだ。それからは息子が山へ行くとシカでもクマでも獲るので安泰に暮らした。ある日、息子が私に「母さん、僕はキムンアイヌ（山男）の息子だから、最近は人肉を食べたくて我慢できない。生きていたら人間を殺して食ってしまいそうだ。僕は浜に檻を建てて薪を積んで火をつけて自殺する。生まれ変わったら虫になって人間の血を吸う。母さんは嘆かないで暮らしてくれ」と言った。そして息子はそのとおりに自殺した。そのキムンアイヌの燃えた灰が虻や蚊になった村が白老だ、と一人の女が言って死んだと。

最近、更に知名度アップした「白老」に関する地名の由来を頭の片隅においてウポポイを訪ねてみるのも楽しいかな、と思うのです。